

さへ満足の出來ない文明であるのに拘らず、我國民が、わずか三四十年間に其の外形を模擬して、是に依つて、眞の幸福を得やうと考へたのは聊か不用意極まる事であります。

我々の一切の行爲を支配するものはかにか、我々の境遇を制し、運命に堪え行く所の力を與ふるものはなに乎。其れは云ふ迄もなく自己の精神一つであります。

慈父聖人は北海の寒島佐渡塚原三味堂に配流されて、降る雪は軒より高く、雷電ひまないやうな御生活、而も怨敵は充滿してをるが、御自身には日本第壹の富めるものと云はれて、其の元氣は驚くべき状態でありました。其の字書、其の文字は實に龍蛇の走る如く當時の意氣を想見せしめるの氣概があります、是れは何の故であるか、そは只其の心を法華經の信仰に托せられたが爲めに、外ならぬのであります。斯る洪大なる心の力を忘れて世人が専ら外界に幸福を焦り、満足を求めやうとするのが大なる不用意極まる過であります。



詞

藻

鷹取山

山内 慧 戒

鷹取山は大檀越波木井實長公が、身延山と俱に宗祖大聖人へ奉獻せし山なり、北に身延山と相對して、西には春木川の上に七面の高山あり、南は高峰雲に蓋はれ、蛇々として遠く駿河に至る、日本三急流の一なる富士川を境に、天子が岳、名聲赫々たる富士の高嶺は、屹然として東に聳立す、往年、甲斐の領主武田信玄が、身延に牙營を築城せんとて、身延山を攻めしは、此鷹取山あるに依る歟。

無數の杉樹蒼鬱として其蔭暗く、鬱蒼たる長梢交に垂れ、綠濃く山勢急峻にして登山の難大なり。

身延山と其名見れ、而も 聖祖の十間四面の御草庵は鷹取の麓にありしかり、鬱蒼たる老樹を見れば、そゞろに六百餘年の昔『北は身延の嶺天を戴き、南は鷹取が嶺雲に續き、深山おれば、晝は日を見奉らず夜も月を詠むることおし』と 宗祖御在世當時を偲び奉られ又『後には峨々たる深山聳えて梢に一乗の果を結び、下枝に鳴く蟬の音滋く前には湯々たる流水湛へて、實相真如の月浮び無明深重の闇晴れて、法性の空に雲もおし。然れば吹く風もゆるぐ木草も流れ水の音まで、此山に妙法五字を唱へずと云ふことなし』の文を拜せば、身延の山のみに限らず鷹取山の木草も俱に、深くく 聖祖の『晝は終日一乗妙典を論談し、夜は竟夜要文誦持の聲』に接し有情悲情悉皆成佛の果を証得し、梢には一乗の果を結び居るならん、東麓には蓮華瀧あり、其處敷町下は、身延の總門にして、聖祖波木井公の對面石の古跡あり、山名異と云へども、身延山と俱に彼山も亦靈山の一分を成すと謂ふべし、身延川を隔て、相對聳せる彼山を

徹せば、延山風光亦平影を失せん歟、身延の山は聊か高く鷹取は少しく低し、兩者恰も姉妹の間にあるとを、又身延山を靈鷲山に擬すとせば、彼の山は鷹取山と言ふを以て、自ら両山鷹鷹の關係あるものゝ如し。これ両々鳥中の勇あるもの、是萬岳に秀る表象歟。

鷲の山風ゆきこふて 絶へぬ御法の六百年
前に鷹取聳へてぞ 御山の深さいやましぬ

春 曉

森 亮 遠

ぬれてもねまし花のしづくに、とむかし人のいひけん、春の夜もやうくにしらみわたりぬ、よろづ、ねぼろの夜よりぬけ出たるやうにて、東の山、白さうす衣うちかつぎて、まだ夢さめやらぬ様いとわかし。せんさいの花、たゞほの白く打かすみて、そこともわかぬ下かげに下りたつれば、鳥の羽ふきか朝風にか、ほたりと、我が袖に落つ